シャークハンター

衝動の中に灯火は宿る　後編

おいがつお

この物語は、令和四年度創苑三号(http://iubungei.cloud-line.com/book/2022/)掲載「シャークハンター　衝動の中に灯火は宿る　前編」の続きとなります。こちらを先に読んでいただけると、より一層、今回のストーリーを楽しめます。

●これまでのあらすじ

ナナオウジの町に人食いツチノコが現れた。そんなウワサを聞きつけた青年、清水海峙(しみずかいち)は、ツチノコの正体を確かめるべく、ナナオウジへと訪れる。

しかし、タカオ・マウンテンに潜伏しているサメたちによって結成された組織〈ワイルドブレーメンズ〉一行は、海峙よりも一足早く、ツチノコを発見していた。

ファイアフラワーと名乗る人食いツチノコと出会った〈ワイルドブレーメンズ〉のボス、バイタリティは、彼を自分の組織へと招き入れる。

しかしある時、ファイアフラワーの様子がおかしくなる。ブレーメンズメンバーの一人であるジャージーデビルに襲いかかったファイアフラワーは、凶暴な唸(うな)り声を上げ、タカオ・マウンテンを下りていくのであった……。

●登場人物

・清水海峙……「ツチノコの正体はサメではないか」という疑惑から、ナナオウジへとツチノコ調査にやってきた青年。その恐るべき真の姿は、今回、明らかとなるだろう。

・バイタリティ……野生のサメ組織〈ワイルドブレーメンズ〉のボス。その身にシャーク因子を宿した「シャークノイド」と呼ばれる超人。

・ウルトラファイド……柴犬を素体としたシャークノイド。〈ワイルドブレーメンズ〉のサブリーダー。

・ロングブーツ……三毛猫を素体としたシャークノイド。〈ワイルドブレーメンズ〉の紅一点。

・ダークレグホーン……ニワトリを素体としたシャークノイド。〈ワイルドブレーメンズ〉のメンバーであり、カゲエ・シャーク因子の捕食者。

・ジャージーデビル……〈ワイルドブレーメンズ〉所属のシャークノイド。見た目は手足のひょろ長い、立ち上がったロバ。

・ファイアフラワー……人食いツチノコの正体。実はシャークノイドであり、〈ワイルドブレーメンズ〉に拾われるまで、ナナオウジでひっそりと生きていた。

I

ひとまず〈ワイルドブレーメンズ〉は隠れ家に戻り、ジャージーデビルの手当てをすることにした。
重症とまではいかないものの、ジャージーデビルはかなりのダメージを負っている。ファイアフラワーの全力攻撃は、想像以上の火力を有していた。
「ほら。お座りよ」
「……うん」
ロングブーツはジャージーデビルを座らせ、医療キットを引っ張り出した。このキットは、下界から購入、ないし略奪してきた医療品を詰め込んだ、〈ワイルドブレーメンズ〉特製医療キットである。
「まさかファイアフラワーがジャビーに攻撃を仕掛けてくるとは」
ウルトラファイドが信じがたいと言った口調でつぶやく。
だが、ロングブーツに包帯を巻いてもらっているジャージーデビルのケガが、かの戦いを物語っている。
かみつき攻撃によりついた生傷、ハナビ・シャーク因子由来の火炎攻撃による火傷……。
間違いなくファイアフラワーがつけたものであった。
「おとなしかったあいつが……」
自分の後輩たちである、ロングブーツ、ダークレグホーン、ジャージーデビルの三人は、程度は違えど、なんだかんだ血気盛んな連中である。
そいつらと比べると、余計にファイフラワーはおとなしいヤツだと、ウルトラファイドは感じていた。
「……」
黙りこくったまま手当てを受けているジャージーデビル。ファイアフラワーを止められなかったことが悔しいのだ。
「ファイアフラワーのヤツ、どうして急におかしくなってしまったん？」
「……わからない、い」
ロングブーツが思わずもらした疑問に、ジャージーデビルはむなしく首を振る。
「でも、きっと、ワケがある、る」
一瞬……ほんの一瞬だが、ファイアフラワーが逃げる

直前、彼の瞳には悲しみの色があった。
　ジャージーデビルは、それが忘れられなかった。きっとファイアフラワーは、望んで自分を攻撃してきたわけではない。
「どうしよう、オカシラ」
　ダークレグホーンが不安そうに、バイタリティに尋ねた。ジャージーデビルのことも、ファイアフラワーのことも心配である。
「……タカオ・マウンテンを下りたってなら、ファイアフラワーはナナオウジに向かったに違いねえ」
　先ほどから、あぐらをかいたまま難しい顔をしていた〈ワイルドブレーメンズ〉の頭領バイタリティであったが、彼はおもむろにそう言い放った。
「あいつを追いかけるぞ」
　オカシラがぐるりとメンバーを見やる。
「ロングブーツ、ダークレグホーン。一緒に来い」
「あいよ」
「わかったぜ！」
　ボスから指名され、返事をする二人。
「ウルトラファイド、ジャージーデビルの二人は、ここに残れ」
「うむ」
　ウルトラファイドが即答する。
　しかし、ジャージーデビルは納得がいっていない様子であった。
「なんで、で？」
　うつむいていた顔を上げたジャージーデビルが、バイタリティに物申す。
「ジャビー、戦える、る。みんなに迷惑、かけない、い」
　ジャージーデビルの言葉とは裏腹に、彼の身体には痛々しく血の滲(にじ)んだ包帯。
「……」
　ロングブーツが包帯を巻く手を止めた。
　ペチン、とジャージーデビルに放たれる、彼女の猫パンチ。
「ウグッ……」
　うめくジャージーデビル。
「ほれ見たことか。ちょっとは休んでな」
　再び包帯をクルクルとやりながら、ロングブーツが言う。
「傷口が開いたら治りが遅くなるよ」
「でも……」
「ジャビー。オカシラは、何もお前が足手まといだと言っているわけじゃない」
　なおもしぶるジャージーデビルをなだめたのは、ウルトラファイドであった。
「もし、全員でナナオウジに行って、その間にファイアフラワーがここに戻ってきたらどうする。みんなの姿が

なかったら、あいつも困ってしまうぞ。誰かがファイアフラワーの帰りを待たねばならん」
　ウルトラファイドが、バイタリティの方へ向き直る。
「そうだろ、オカシラ？」
「ああ」
　バイタリティは組織のサブリーダーに相づちを打つ。
「わかったな、ジャビー」
「……」
　ウルトラファイドがとバイタリティの言葉を、じっと聞くジャージーデビル。
「わかった、た。ジャビー、待つ、つ」
「よし」
　ジャージーデビルに対してうなずいたバイタリティは、続けてロングブーツへと話しかける。
「ブーツ、ジャビーの手当ては終わったか」
「うん」
　ロングブーツは返事をしながら爪で包帯を切り、残りを医療キットにしまった。
　あとはシャークノイドのシャーク回復力があれば、ジャージーデビルもじきに完治するだろう。
　バイタリティはひとまず胸をなでおろす。
　そして彼は膝を打ち、立ち上がった。
「ブーツ、ダグ。ファイアフラワーを連れ帰るぞ！」
「イエス、オカシラ！」

　二体のアニマルシャークノイドが、同時に口を開く。
「出発だ！」
　バイタリティを先頭にした三体のサメは拠点を離れ、魔山タカオ・マウンテンを下ってゆく。
　自分たちの仲間たるツチノコを連れ帰るべく、小規模サメ組織〈ワイルドブレーメンズ〉が動き出した。

　バイタリティたちがタカオ・マウンテンを下りた翌日、ナナオウジへと走る一台の車あり。
　車の中にいるのは四人。
　助手席に一人、後部座席に二人、そして運転席でハンドルを握る、干からびた魚のような頭部をし、磯の香りがするスーツを着た人型の生き物。カプセルニボシと呼ばれる、トリノスナ研究所開発の人工生命体である。
　カプセルニボシに運転を任せ、残った三人の男たちはミッションの確認を行っていた。
「すると、ツチノコ……ファイアフラワーはナナオウジにいるということですね？」
　後部座席の一人が、助手席に座る男に話しかけた。

「はい。ナナオウジの未確認生物。これは丸いヘビのような外見をしている。これは火を吹き、火花を散らして人を喰らう」
助手席の男……レッドキャップはファイルのコピーを手にし、答える。
「ファイアフラワーの情報と一致します」
コピーのファイルには、
『試験体アニマルシャークノイド』
『ファイアフラワー』
『ハナビ・シャーク因子捕食者』
と書かれていた。
「で、俺はその人食いツチノコとやらを取っ捕まえてくりゃいいのか？」
後部座席でくつろぎながら尋ねるもう一人の男は、オオナミ・コーポレーションの、クリングケークという者であった。オオナミ・コーポレーションとは、日本でも随一（ずいいち）の大企業である。
そして、オオナミ・コーポレーションが抱える大研究所の名前が……トリノスナ研究所。
「できれば生け捕りに。アレの研究が済む前に脱走されてしまったものですから」
トリノスナ研究所研究員のレッドキャップが答える。
「ありがとうございます、クリングケークさん。わざわざ本社からお越しになってもらって」
「いいさ。もらうものはもらってるしな」
今ごろクリングケークの口座には、臨時ボーナスが入っていることだろう。
「おい、あんたらもシャークノイドなんだろ？」
クリングケークは、隣の男に話しかけた。
「ええ。クリングケークさんほどの戦闘力があるわけではないですが」
彼はタイマイという名のシャークノイドである。トリノスナ研究所所属のサメだ。
クリングケーク、タイマイ、レッドキャップ。彼らは暗黒サメ組織から放たれたシャークノイドであった。
――もうお気づきであろう。恐ろしいことに、この車には三体のサメが乗っているのだ！　助手席と後部座席、合わせて三体のサメが！
「非常時にはサポートします。念のため、戦闘用カプセルニボシも持ちこんでおりますので」
「信用されてねえな」
「念には念を、です。対象は仮にも、研究所から脱走したアニマルシャークノイド。それなりの戦いを予想するべきかと」
「そうかい」
車はまっすぐ、街道を進む。
「ニボシー」
キャップをかぶったカプセルニボシが、ほのかな磯の

香りで車内を落ち着かせる。
目的地はナナオウジ。
ナナオウジの人食いツチノコを捕えるため、彼らは行く。
しかし、それは慈善事業ではなく、あくまでオオナミ・コーポレーションの都合のためであった。

Ⅱ

ウエノシティは日本の重要都市である。かつての大戦によって甚大(じんだい)な被害を受けた国を維持するため、ウエノシティは眠ることはない。
昼夜問わず、人工的な明かりに満ちた都市、それがウエノシティなのだ。
ナナオウジもウエノシティ内に存在する町の例に漏(も)れず、そこここの建物から灯る光が、真夜中の町中を照らしている。
だが、その割には人通りが相当に少ない。あの人食いツチノコのウワサは、もはやナナオウジで知らぬ者がいないほどであったからだ。
今のナナオウジの夜を歩く者は、浮浪者か、犯罪者か、あるいは自殺志願者か、頭の悪いもの好きか……
押氏吉(おしよし)は家宅侵入窃盗犯であった。
彼にとって、人食いツチノコのウワサは、非常に助かるものであった。仕事がしやすくなったのだ。
家屋に浸入する際には、人目に気をつける必要がある。ツチノコが来るまえは多分に周囲を警戒しなければならなかったが、現在のナナオウジの夜は、めっきり人影がない。これは泥棒をするには最適な環境であった。
実際、最近のアガリは上々だ。仮にツチノコに出会ってしまっても、逃げ足には自信がある。
万が一、ツチノコに見つかった時は逃げればよい。執念深い警察と違い、ツチノコからは一回逃げ切れば、それでおしまいなのだから。
お金のニオイがする家宅を求め、押氏吉はナナオウジを散策する。
最初に定めていた家々からは、あらかた金目の物を取っていってしまったため、彼は捜索範囲を少し広げていた。
ツチノコには感謝しなければいけないな。
深く帽子をかぶった押氏吉は、街灯の光を避けながら、テクテクと歩く。縄張りを悠々(ゆうゆう)と闊歩する、巨大ツキノワグマのように。

ところが安寧の時間は、どこからか聞こえた一つの鳴き声によって終わりを告げた。
「ツチィィイイイイ！」
野獣のような鳴き声が、押氏吉の耳を貫く。
不意のできごとに、硬直する押氏吉の体。
単なる酔っ払いの叫び声ではないだろう。明らかに人間離れした声だ。
突然変異した巨大カラスか、巨大ネズミか……あるいは。
あるいは、ウワサのツチノコなのか？
いまだヤツの姿は見えないが、もし、出くわして、そして襲いかかってきたら。
よもや自分がウワサのツチノコに出会うとは、内心考えてもいなかった。
「ちくしょう！」
とりあえず、いざという時の逃げ道を考えるべく、押氏吉は現在地周辺のマップを脳内に広げた。
と、その時！
バチバチバチッ！
音を立てて火花が舞った直後、押氏吉の腹に穴が開く！
「オボーッ！」
暗闇から現れた人食いツチノコが、彼の体を食い千切ったのだ！
「ツチァアア……！」
腹を狙って跳び上がったツチノコは、道路の真ん中に降り立ち、獲物の方へと顔を向ける。
口元に肉と血を付けたツチノコを見た押氏吉の目が、絶望に染まった。
「サ、サメッ……！」
ツチノコがサメを彷彿とさせる戦闘服を着ているのだ。
恐怖！　人食いツチノコの正体はサメだったのだ！
「サメエエエエエエ！」
悲鳴を上げることしかできない押氏吉に、
「ツチィィイイ！」
ナナオウジの人食いツチノコは牙を突き立て、押氏吉の胴体を切り裂いた。
「オボアッ……」
容赦のないとどめを刺された押氏吉。
「……」
彼はツチノコの餌食となった。
今日もまた一人、サメによる犠牲者が出たのである。
「グルグル……」
ツチノコは血に濡れた口元を拭おうともせず、次なる獲物を探しに行く。
ナナオウジの人食いツチノコの名は、ファイアフラワ

ーといった。
彼の意識は混濁(こんだく)していた。ただ言いようもない興奮だけが、ファイアフラワーを突き動かしていた。
七色に渦巻く衝動は、彼を捕食し、彼に捕食されたシャーク因子によるものであった。
太古のサメは、目につく人々を殺して回った、凶悪な存在である。ファイアフラワーに限らず、シャークノイドとなった者は、多かれ少なかれ、シャーク因子の凶暴性に飲みこまれ、性格もサメに近いものになっていく。
しかし、ファイアフラワーを捕食したシャーク因子は、不安定に彼を蝕(むしば)んでいた。シャーク因子が鳴りを潜めているときは、本来のおとなしい無害なツチノコである彼だが、ハナビ・シャークの魂が彼を支配した時、ファイアフラワーは邪悪なサメとして暴れまわるのだ。
今、自身に宿ったサメの魂が強く顕現(けんげん)している状態のファイアフラワーは、誰かを傷つけずにはいられなくなっているのだ！
早く、早く、次の獲物を！
誰でもいいから殺したい気分だ！
ファイアフラワーは、ハナビ・シャーク因子の衝動に操られるままに、ナナオウジを徘徊(はいかい)する。
もはや夜のナナオウジは、ツチノコの恐怖が支配する時間となった。
「グルグルグル……」
シャーク殺気を帯びたツチノコは、不機嫌そうな声を上げている。
ファイアフラワーは苛立っていた。ウワサと事実の影響力は強く、人間たちは家に引きこもっている。
誰かいないのか。次にこの牙にかけるべき人間は。
先ほど、人間を一人血祭りにあげることができたのはラッキーであった。
「ツチイ……！」
目を血走らせる人食いツチノコ。
誰か、誰か……
「……ツチァッ！」
一点、ファイアフラワーの視線が釘付けになった。
おお、あの路地裏に入っていく青年を見よ。まったくもって無防備に、人気のない路地裏へと入っていく青年を。
いた。
血と汗とフカヒレにまみれた衝動を満たしてくれる人間が。
ファイアフラワーは目を見開く。
殺意を自覚するまえに、ナナオウジの人食いツチノコは走り出した。
あの人間を殺すのだ！
邪悪な思考に染まったツチノコは路地裏にダッシュで入りこみ、

「ツチイイイイ！」
勢いのまま、青年の首に向けて牙を突き立てるべく跳びかかる。
振り返った青年。
交差する、捕食者と被捕食者の視線。
そして、哀れにもツチノコの犠牲者の首からは鮮血が舞う――はずだった。

ガチッ

ファイアフラワーの牙と牙がぶつかり、小さな音を立てる。
彼の攻撃は空を切っただけであった。
ファイアフラワーの殺人対象であった青年は、攻撃が届くまえに、地面を蹴り、牙をかわしたのだ。
彼はそのまま空中で一回転し、ツチノコの背後に着地。
ファイアフラワーは舌を巻いた。
サメである自分の攻撃をかわすとは。
「ようやく見つけたぞ」
青年はツチノコへと振り返り、こう言い放った。
「貴様だな、ナナオウジの人食いツチノコは」
聞く者を震えさせるような声色で。
「ツ……ツチイッ」
困惑するファイアフラワーをよそに、青年は言葉を続ける。
「やはりツチノコの正体はサメだったようだな」
ツチノコを見下ろす青年――清水海峙は確信した。
こやつはシャークスーツを身に着けている。ツチノコの正体がシャーク因子捕食者、シャークノイドであることは疑いようもない。
一週間前からナナオウジにやってきた海峙は、夜ごとツチノコ調査に繰り出していた。すべては、ツチノコの正体を確かめるため。ツチノコがシャークノイドであった場合、これを狩るため。
狂気じみた生真面目な探索が、今夜、実を結んだ。
「ナナオウジでの暴虐も今日限りだ、ツチノコよ」
海峙を包む、青銀のオーラ。これは、そう、超人シャークノイドの証、シャークオーラ！
魚群のようなシャークオーラが、シャークスーツを形成していく。
――そして。海峙は変身した。
青銀のシャークスーツのシャークノイドへと。
「グルッ……」
ファイアフラワーは後ずさった。今夜二人目の獲物は、ただの人間ではなかった。
相手はシャークノイドだったのだ！
「サメ狩りの時間だ。欲望のままに人を殺して回る貴様に救いはない」

海峙のシャークネームは、シャークハンター。
彼はサメを狩るサメであった。
冷徹な瞳で、ファイアフラワーをねめつけるシャークハンター。
「ツチィイ……！」
ファイアフラワーも戦闘態勢に移った。
ナナオウジの静かな路地裏、シャークハンターとファイアフラワーのシャーク眼力がぶつかり合い。

「ツチァアアアア！」
膠着を破るように吠えたファイアフラワー！
カチカチと牙を打ち鳴らした彼は、
「ツチィッ！」
口から火の粉を発射！
ターゲットは当然シャークハンターだ！
シャークハンターはシャークスーツの手甲で防御、冷静にこれに対処する。
「……」
無言のまま、シャークハンターは一歩踏み出す。
「ツチ……」
その姿に、ファイアフラワーはひるんだ。
いまだ、攻撃に転じる様子のない敵ではある。
されど。あの瞳を見よ。
曇りのない殺意。

決断的にサメを狩るという意志。
それが目の前のシャークノイドにはある。
先ほどまでは人間に対して恐怖を与える側だった人食いツチノコだが、今度は自分が恐怖に怯える側に陥ったのだ。
「……ツチィイ！」
にも関わらず、身体の内から呼びかける獰猛なサメの衝動は、依然としてファイアフラワーを狂乱させていた。
人間であろうがシャークノイドであろうが、シャーク因子の暴走に付き合ってくれる存在であることに、変わりはなかった。
「ツチァアアッ！」
火吹き攻撃をやめたファイアフラワーは、シャーク因子に流されるまま、再びシャークハンターの首筋を狙う。
あれは今まで何人もの人間を仕留めた、未確認生物めいた危険な牙だ！　〈ワイルドブレーメンズ〉のメンバー、ジャージーデビルにも傷を負わせており、対シャークノイドへの攻撃性能も確認済みである！
「来たな」
しかし、これはシャークハンターの思うツボであった。
躍りかかってきたファイアフラワーに対して、わずかにシャークハンターが腰を落とす。
「……ヅヂァアッ……！」
ファイアフラワーが白目を剥く。

シャークハンターの、強烈なカウンターキック。
直撃であった。
サッカーボールのように蹴り飛ばされたファイアフラワー。
ややあって、バゴン、と音が鳴る。ツチノコが壁に叩きつけられた音であった。
「……ッ」
ファイアフラワーの肺の中の空気が、一気に吐き出される。
下手をすれば一撃で絶命しかねないほどの威力であったが、なんとか彼は生き延びていた。
「……ツチ……」
今の攻撃のショックで、ファイアフラワーは完全に正気に戻っていた。
シャーク因子に支配されているときの記憶はおぼろげになりがちであったが、このシャークノイドと対峙していたことは覚えている。
自分を慈悲なく狩るべく対峙するシャークノイドに、文字通り手も足も出ず叩き潰されたことを。
「サメは狩る」
ズルズルと地面に落ちたファイアフラワーを見下ろすシャークハンター。
力の差は圧倒的であった。万に一つも、ファイアフラワーの逆転は不可能であろう。

今宵、人々を震撼させたナナオウジの人食いツチノコにとうとう引導が渡される。
……かに思えた。
「ミェアアア！」
殺人的な猫のような鳴き声が屋根の上から聞こえた直後、シャークハンターに放たれた一振りのレイピア！
油断はしていないつもりだったが、視覚外の攻撃であった。
「グアッ……！」
手痛い攻撃を喰らったシャークハンター。
「見たか！」
華麗に地へ降り立ったのは、フェンシングのような構えを取った三毛猫。
「ファイアフラワー！」
ツチノコの名が呼ばれ、ぐったりとした彼の体が、何かに抱えられた。真っ黒なニワトリ……の影が、手羽でファイアフラワーを拾い上げたのである。
「……新手か！」
シャークハンターは戦の乱入者を分析した。
シャークスーツを着た動物、つまりアニマルシャークノイドが二体。
一体はレイピアを抜いた三毛猫。もう一体は、実体を持つ自身の影で、ツチノコを守る灰色のニワトリ。
さらにもう一人、大股でこちらに歩いてくる人影。

「てめえがいたのか、シャークハンター……」
ボロボロのコートを身に着けた男。
「……！」
猫にニワトリ、そして彼らを率いるシャークオーラをまとった男。
シャークハンターは、この異形の集団を知っていた。
「〈ワイルドブレーメンズ〉……！」

Ⅲ

「なぜてめえがここにいる、シャークハンター？」
最後に現れたコートの男、〈ワイルドブレーメンズ〉のボス、バイタリティが、シャークハンターに問う。
「それはこちらのセリフだ、バイタリティ」
油断なく敵に向き合いながら、シャークハンターは問い返した。
「ファイアフラワーを連れ戻しに来たんだよぉ」
バイタリティの視線の先には、致命傷を受けたツチノコ。
彼の口にしたファイアフラワーとは、ツチノコのシャークネームであろう。
「……そうか」
一言、述べたシャークハンターは、古代武術カンブリア殺法を構えた。
そう、驚くべきことに、シャークハンターは古代武術カンブリア殺法の継承者なのである。
「俺はそのファイアフラワーを狩りに来たのだ」
「なんだと？」
「人に仇なすサメは狩る」
「……チッ」
バイタリティは舌打ちをした。
「てめえがファイアフラワーに手ぇ出すつもりなら……まずは俺たちが相手だ」
そう宣言すると共に、バイタリティの頭部が見る見るうちに変形していく。
人肌からぞわぞわとサメハダが生え、鼻づらが伸び、裂けていく口から覗くのは……サメの牙！
なんということであろうか！　彼はシャークスーツを着て変身するのではなく、自身が直接サメと化す、異端の人工シャークノイドなのだ！
この根源的サメ恐怖を思い知らせる姿を目の当たりにすれば、常人であれば悲鳴を上げ、たちまちのうちに失神するだろう！

「ぶっ殺してやるぜ、シャークハンター」
全身が完全にサメハダに覆われたバイタリティが、怪物じみた声でシャークハンターに言った。
ロングブーツとダークレグホーンも、バイタリティの両隣に立つ。
「やってみろ」
三体一の状況となってしまったが、シャークハンターはひるむことなく言い返した。
今ここでツチノコを逃がせば、新たな犠牲者が出るやもしれない。いわんや、〈ワイルドブレーメンズ〉も放っておけば、人間に危害をもたらすサメ組織だ。
「順番が変わっただけだ。まずはお前たち三人を狩り、次にあのツチノコを狩る」
「抜かせ！」
ワイルドブレーメンズのボス自らが先陣を切り、弱肉強食の戦いが始まった！
シャークハンターに突っこんでくるバイタリティが、彼目がけて凶悪なパンチ。
みすみすこれを受けるつもりもないシャークハンターは、自身の左手で相手の軌道を逸らした。
返しの右フック！
と、したかったシャークハンターであったが、
「コケーッ！」
ダークレグホーンの影が、シャークハンターの右から迫る！
左方へ側転をすることで影を逃れたシャークハンター。
そこへロングブーツのレイピア！
「ミエァァア！」
肉食獣の爪のごときレイピアが、側転中のシャークハンターに突き立てられる。
とはいえシャークハンターもさるもの、彼は宙にある右足でレイピアを持った腕を蹴り、攻撃を受け流した。
態勢を崩したロングブーツに、側転が終わったシャークハンターの裏拳！
「ミエァァッ！」
吹き飛ぶロングブーツに追撃をかけるべく動き出そうとするシャークハンターの眼前に、踊りこんだのはバイタリティだ。
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
古文書に描かれしレジェンドシャーク、ホオジロザメを想起させるバイタリティの咆哮！
彼の捕食したホジロ・シャーク因子が活性化し、戦闘意欲を向上させているのだ！
ロングブーツをあきらめたシャークハンターは後方へ退き、バイタリティの噛み砕き攻撃を回避。
そんな彼の近くにいたのは、ダークレグホーンだ。
「コケーッ！」
翼を広げて宙から急降下してくる彼の脚は黒く染まり、

従来の数倍の大きさになっている。
自身の影をレッグサポーターのように装着させることで、キックの威力を底上げする算段だ。
強力な跳び蹴りは、シャークハンターの頭部をえぐるつもりである！
この攻撃も、シャークハンターを傷つけることは叶わなかった。
シャークハンターの太古味ある動作を見よ。体を柔軟に曲げ、敵の攻撃をいなす古代武術カンブリア殺法の回避技、エビゾリだ！
エビゾリ後、シャークハンターは流れるように下段キックをダークレグホーンに放った。
「ゴケーッ！」
地面を転がるダークレグホーン。ここも追撃を仕掛けたい場面だ。
「ミエァァア！」
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
そうは言っても、やはり他のブレーメンズメンバーがそれを許さない。
ロングブーツとバイタリティ二人がかりの妨害により、シャークハンターは防御に移らざるを得なくなった。
「ぬぅ……」
シャークハンターは、並み居るシャークノイドの中でも屈指の実力者であった。数多くのサメを狩ってきた実績の持ち主である。
その彼をもってしても、〈ワイルドブレーメンズ〉の連携プレーは厄介であった。
攻め入る隙がなかなか見出せない。誰かに攻撃を命中させても、その次に繋がらないのだ。
それに、シャークハンターには懸念点（けねんてん）があった。
ファイアフラワーである。
今は戦線離脱している彼だが、いつ復帰して戦闘に参加してくるかわからない。
そうなれば四体一だ。
一度戦って、ファイアフラワーが弱敵であることは判断できたものの、〈ワイルドブレーメンズ〉という強力なサメが来た以上、注意すべき対象が増えるだけでも面倒である。
「……む？」
そこまで考えたシャークハンターであったが、あることに気がついた。
ファイアフラワーがいない。
どこからか不意打ちをしかけるつもりか。
しかし、この状況は〈ワイルドブレーメンズ〉にとっても想定外だったようだ。
「おい、ファイアフラワーはどこだ？」
バイタリティがアニマルシャークノイド二体に尋ねる。
「えっ……」

緊張状態の中、気配を探る一同。
「この場から離れた？」
ロングブーツがレイピアを構えながら言う。
「あいつ、またおかしくなっちまったのか？」
影を戻すダークレグホーンも、周囲に目をやる。
「……ブーツ、ダグ！」
ファイアフラワーがいなくなったと理解したバイタリティの判断は早かった。
「ファイアフラワーを探せ！　あいつを一人にさせるな！」
「イエス、オカシラ！」
バイタリティとシャークハンターに背を向け、この場から離脱する二人。
バイタリティのことが心配ではあったが、非常時におけるオカシラの命令は絶対である。
一方、ロングブーツとダークレグホーンを追いかけたかったシャークハンターであるが、目の前のバイタリティが睨みを利かせていた。
動くに動けない。
「……くっ！」
三体もサメを逃がしてしまったか……！
ナナオウジの町に消えて行く猫とニワトリを見ながら、シャークハンターは歯がみした。
それでも。悔やんでいるヒマはない。
まだ目の前に、狩るべきサメがいる。
ならば。
「……バイタリティ。最初にお前を狩る」
シャークハンターは改めて古代武術カンブリア殺法を構えなおした。
「その後は、あのアニマルシャークノイドたちだ」
「させるかよ」
互いに仕切り直す二人。
ここからは一対一の戦いだ。
「……サメを狩る！」
シャークハンターの先制攻撃！
「クソカスがぁーッ！」
対するバイタリティもこれに迎撃だ！
ナナオウジの路地裏で、サメ同士のダイナミックな接近戦が繰り広げられる！　かつてサメが地上で暴れ回った光景がフラッシュバックするかのような、地獄絵図のごとき戦いだ！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
古代武術カンブリア殺法特有の発声……カンブリアシャウトと共に、シャークハンターが回し蹴りを放った。
この攻撃はバイタリティの脇腹に命中、しかし。
「効くかあッ！」
相手は回し蹴りをものともせず、シャークハンターに右、左とワンツーパンチ。

目を見張るタフネス！　ホジロ・シャーク因子によって得た、バイタリティの強靭な肉体だ。
実際、シャークハンターよりも頭一つ以上抜けて大柄なバイタリティの方が、単純なシャーク生命力やシャーク筋力は上である。
とはいえ、シャークハンターにも相手にはない武器があった。自身に宿したイワシ・シャーク因子由来の莫大なシャークオーラと、師匠から伝授された古代武術カンブリア殺法だ。
両者の実力は拮抗しており、互いに一歩も引かぬ状況であった。
「なんだってファイアフラワーを殺す気だ、シャークハンター！」
右ストレートを飛ばしながら、バイタリティが叫ぶ。
シャークハンターはこの攻撃をかいくぐり、
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
バイタリティにアッパーカット。
ヒット！
だが、バイタリティは耐久力に物を言わせ、ひるむことなくシャークハンターに膝蹴りを入れた。
「グオッ……！」
かなりの威力だったが、シャークハンターはカンブリアオーラ――古代武術カンブリア殺法独特の力だ――を腹筋に込め、ダメージを軽減。

反撃に転じるシャークハンターに対し、バイタリティがさらに叫ぶ。
「てめえにゃファイアフラワーを殺させねえ！　あいつは俺たちの家族なんだよぉーッ！」
「……ッ！」
シャークハンターの応戦する拳が、思わず緩みそうになる。
……家族、家族かッ……！
おそらくこの男は、あのファイアフラワーというツチノコを〈ワイルドブレーメンズ〉に加えたのだろう。
バイタリティにとって、〈ワイルドブレーメンズ〉は何にも代えがたい存在だ。大切なメンバーを狩ろうとする自分と敵対するのは、至極（しごく）当然のことである。
……だがしかし、シャークハンターにツチノコ狩りを撤回するという選択肢はない。
ツチノコの被害に遭った、おでん屋の田牧とのインタビューを思い出した。
彼は泣いていた。仲の良かった自分のお客が、ツチノコに殺されたことに。
「……なぜファイアフラワーを殺すかだと？」
シャークハンターは手の平に爪が食いこまん勢いで、拳を握り直し、バイタリティに攻撃を加える！
「ヤツが……ヤツがサメだからだ！　人を殺すサメだからだ！　サメはすべて狩る！　この俺が！」

「クソッタレエェェエエエ！」
二体のサメの戦闘が、なおも展開される。
なぜ彼らは戦うのか。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
一体はナナオウジに住む人々を守るため。
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
一体は、新しい家族を守るため。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
シャークハンターのカンブリアシャウトとバイタリティの咆哮が、路地裏に響く。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
……

ロングブーツとダークレグホーンは、ナナオウジの町を駆けまわっていた。
もはや自分たちがアニマルシャークノイドであることを隠そうともせず、町中でファイアフラワーの名前を呼び続けている。
人間に出会ったら、その時はその時だ。
「ファイアフラワー！」
今はファイアフラワーを探すのが最優先事項であった。
「あのダメージだ、それほど遠くには行ってないはず」
ロングブーツがキョロキョロと首を動かしながら言う。
ダークレグホーンも、側溝や街路樹の枝葉に首を突っ込み、手当たり次第にファイアフラワーを探している。
「ファイアフラワー！」
二人の声に、返事をする者はいない。
ナナオウジの夜は深い。
ロングブーツとダークレグホーンの、不安ばかりが募っていく。
「あいつ車に轢かれてたりしてねえよな、ブーツ姉貴ぃ」
常人よりも丈夫なシャークノイドと言えど、弱った体で車に激突すれば死ぬ。
ましてや、道路の真ん中で力尽きていたら。
無抵抗のまま自動車に巻き込まれ、ペシャンコになったファイアフラワーを想像してしまい、ダークレグホーンは青い顔をした。
「……あっ、姉貴！」
と、視界の片隅に映ったゴミ捨て場のゴミ袋の山から、ちょこんとはみ出ていたものがあった。
「いたぜ、ファイアフラワーだ！」

ツチノコのしっぽである。
「ファイアフラワーッ！」
我先にとゴミ捨て場へ急ぐ、ロングブーツとダークレグホーン。
そして二人は山盛りになったゴミ袋を放り投げ……隠れていた者の姿があらわとなる。
じっと動かないファイアフラワーだ。
「ファイアフラワー」
ロングブーツが優しく声をかけた。うずくまったファイアフラワーに向かって。
「探したんだぜ、お前のこと」
ダークレグホーンもそれに続く。
「……ツ、ツチィ」
もぞもぞと体をくねらせ、ゴミ捨て場から去ろうとするファイアフラワーを、
「動くな動くな」
ロングブーツが捕まえた。
「タカオ・マウンテンに戻るよ。ジャージーデビルに謝るんだ」
「ジャビーだってお前のこと、心配してるんだぞ」
二人の言葉を聞き、ファイアフラワーは驚いたような表情で顔を上げる。
自分は……自分は彼らの仲間を傷つけた、凶暴な人食いツチノコである。それなのに、まだ自分のことを受け入れると言うのか。
でも、だからこそ。
「……ツチ」
ファイアフラワーは、悲しげに首を振った。そして、ロングブーツの腕から逃れようともがく。
「その傷で暴れるなよ」
ダークレグホーンが注意する。
「勝手にどこか行くな。野生の中では、そういうヤツから死んじまうんだぞ。オカシラが言ってた」
「ツ、ツチ……」
たじろぐファイアフラワー。
「……それとも、あれか？」
ファイアフラワーの態度を受け、ロングブーツのヒゲが垂れた。
「アタシらとの生活はイヤだったか？」
悲痛な彼女の声に、
「ツチィ」
ファイアフラワーはフルフルと首を横に振る。
彼は怖かったのだ。再び仲間を傷つけることが。
ジャージーデビルと戦った時、彼はシャーク因子の暴走のおもむくままに牙をむいた。
仲間を攻撃することに、ためらいなどなかった。ためらうどころか、悦楽のようなものすら感じていた。
サメの欲望の塊となり、残酷な感情を抱いてしまって

いた分、正気に戻った時の彼の気持ちは計り知れないだろう。彼は〈ワイルドブレーメンズ〉から逃げるように、再びナナオウジへとやってきた。
　またシャーク因子に飲みこまれてしまった時、今度こそ〈ワイルドブレーメンズ〉の誰かを殺してしまうかもしれなかった。
　そんなムゴイことをやってしまうくらいなら、一人でいる方がいい。
「……だから、アタシたちから逃げたんか」
　ファイアフラワーの考えを聞き、ロングブーツはポツリとつぶやいた。
「そんなこと……」
　ファイアフラワーに何か言いかけたロングブーツであったが。

「フギャーッ！」
　金切り声を上げるロングブーツ！
　何か飛び道具のようなものが、ロングブーツの胴体にヒットしたのである！
「ブーツ姉貴！」
　ロングブーツはゴミ袋に突っ込んだ。
　彼女の体にいまだ付着した飛び道具は、粘着力のある丸い白玉。これがロングブーツとゴミ袋を強力にくっつけており、彼女はもみくちゃになっていた。

「ようやく見つけましたよ、ファイアフラワー」
「誰だ！」
　ダークレグホーンが警戒する方向から、ゆっくりと現れる三つの人影。
「……シャークノイド！」
　ダークレグホーンの言う通り、三人ともシャークスーツを身に着けている。
　怪奇！　三体のサメがゴミ捨て場にやってきたのだ！
「ファイアフラワーを知ってるのか！」
　ダークレグホーンは、素早く相手のシャークスーツの胸元を確認する。
〈Ｃｌｉｎｇ　Ｃａｋｅ〉
〈Ｔａｉｍａｉ〉
〈Ｒｅｄｃａｐ〉
　それぞれのシャークネームが書かれていた。
「ほう。ダークレグホーンもいましたか」
「それに、今クリングケークさんが攻撃を当てた対象は、ロングブーツです」
「つまり〈ワイルドブレーメンズ〉ですね？」
「そういうことです」
　レッドキャップとタイマイが言う。
「まさか、お前ら……！」
　ダークレグホーンが叫んだ。
「トリノスナ研究所！」

邪悪なシャークノイド二人は、ニヤリと笑う。
「一石二鳥です。クリングケークさん、ファイアフラワーは生け捕りにしてほしいところですが、あとの二匹は殺して構いません」
「りょーかい」
クリングケークと呼ばれたシャークノイドの手の平から生まれる白玉。最初にロングブーツに不意打ちを成功させたのはこいつだ。
淡々と仕事をこなす受付窓口のような、三人のやりとり。彼らにとって、猫の命もニワトリの命も、塵芥に等しい。
「……ふッ……ふざけるな！」
邪悪なサメたちに怒りの声を上げたのは、直情家のダークレグホーンであった。とさかを真っ赤にした彼が、肥大化させた影を形成する。
「ふざけるな！　生け捕りだの殺すだの勝手に言いやがって！　ファイアフラワーは……〈ワイルドブレーメンズ〉はお前らのおもちゃじゃねえ！」
ダークレグホーンは完全に、三体のシャークノイドを返り討ちにしてやる腹づもりになっていた。
「待ちな、ダグ！」
その彼を、ロングブーツが後ろから止める。
苦闘の末、無理やり白玉を引っぺがしたロングブーツは、弱ったツチノコを抱き上げていた。
「アタシはファイアフラワーを守る。その間に、ダグはオカシラにこのことを伝えるんだ」
「姉貴！」
「ここで二人とも死ぬのが一番マズい！　早く行け！」
「……！」
苦渋の決断であった。
「ブーツ姉貴、無事でいてくれよ！」
ダークレグホーンは、来た道を全力で戻り始めた。
「逃亡ですか」
「では、私があのニワトリを仕留めます」
その後ろを追いかけるのはレッドキャップ。
頭部の真っ赤なシャークスーツを着た彼は、腰のベルトから包丁を抜き、ダークレグホーンを殺しにかかる！
「キエエエエエ！」
先ほどまでの様子とは打って変わった、レッドキャップの奇声！　包丁を片手にした姿は、まるで狂った快楽屠殺精肉加工業者だ！
「……そっちも無事でな、ダグ」
背中でダークレグホーンを見送ったロングブーツは、覚悟を決める。
「で、そこのネコチャンは俺たちの相手をしてくれるのか」
白玉を手で遊ばせるクリングケーク。
強敵。

ロングブーツの野生の勘がささやく。
ゆえに、取るべき行動は。
「まさか。さすがのアタシも正面からケンカしないよ。あんたらヤバそうだし、二対一だし。……だから」
ファイアフラワーを抱えながら、俊敏な動きでロングブーツは街路樹に飛び移った。
「……鬼ごっこだ！」

Ⅳ

ナナオウジの路地裏で始まった戦闘の決着は、いまだつく気配がなかった。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
古代武術カンブリア殺法の拳技、シャークハンターのアノマロ・キョウダが炸裂。バイタリティの横面を殴りつける。
並のサメであれば、首が百二十度は曲がるほどの当たり具合だ！
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
しかし鼻から血を流しながらも、バイタリティは攻撃の手を緩めない。
シャークハンターを引き裂くための、鋭い爪が迫る。
さすがに相手の耐久力を理解してきたシャークハンターは、この反撃を予測していた。
身を引き、バイタリティの爪を回避。
そのまま二人は、一度距離を取った。
「……まったくしぶといサメだ」
「てめえもな」
バイタリティについてはもはや説明不要であるが、シャークハンターも大概、ずば抜けた体力を有している。
底なしのシャーク生命力の持ち主であるシャークハンターとバイタリティをして、現在、お互い相当の疲弊をしていた。
それほどまでに、この戦いは苛烈であった。
身体のあちこちにダメージの痕が残る二人の姿を目にしたなら、それがわかるはずだ。
牙、爪、丈夫な尻尾、全身をフルに活用するバイタリティ独自の荒々しいホジロ式闘術。
シャークオーラをカンブリアオーラへと変換し、最低限の力でもって高度な技を用いる、シャークハンターの古代武術カンブリア殺法。
「……」
ある種対極的な戦闘スタイルの二人は、いかにして相

手を殺すか、脳内で予行演習を行う。
（……どう攻めるべきか）
いたずらにシャークオーラを消耗してしまっているシャークハンターではあるが、バイタリティの次は三体のアニマルシャークノイドを見つけ、狩らなければならない。
早々にバイタリティを狩っておきたかったが、予想をはるかに超えた長期戦。
だが、焦りは禁物だ。隙を見せれば、ツチノコを狩る前に、こっちがバイタリティに殺されてしまう。
（半端な攻撃ではダメだ。どこかでカンブリア・エクスプロージョンを使い、ヤツを狩る）
焦るな。急いでも良いことはない。
タイミングを見計らい、再び接近戦だ。
「……」
お互いにお互いの出方をうかがう、シャークハンターとバイタリティ。
「……」
割れたコップのフチがごとき静寂（せいじゃく）。
「オカシラーッ！」
これを打ち破ったのは、一羽のニワトリの鳴き声であった。
「た、た、た、大変だぜーッ！」
「ダグ！」
シャークハンターから目を離さず、慌てふためきながら戻ってきたダークレグホーンに、バイタリティが怒鳴る。
「大変だぜ、オカシラ！」
「どうした、ファイアフラワーは見つかったのか！」
「見つかったは見つかった！　でも大変なんだ！　トリノスナ研究所の連中が来たんだよ！」
「なにーッ！」
バイタリティが叫んだ。
「一人こっちに向かってきてる！」
ダークレグホーンの言葉に答えるかのように、
「ニボシーッ！」
すぐさま特徴的な声が聞こえてくる。
「ニボシーッ！」
「ニボシーッ！」
波のように何重にも響くこの声は……戦闘用カプセルニボシらの声だ！
「ニボシーッ！」
「ニボシーッ！」
「ニボシーッ！」
ニボシたちの声はさらに大きくなっていき、さらには、磯のニオイまで漂ってきた。
カプセルニボシたちが近くまで来ている。

「いましたねえ、ダークレグホーン……」
やがて、磯スーツを着用した多数のカプセルニボシを引きつれ、一体のシャークノイドが現れた。頭部の赤いシャークスーツを着たシャークノイドである。
「すまねえオカシラ。あのレッドキャップってヤツのせいで、ここまで来るのに時間を食っちまった」
ダークレグホーンには、いくらかの切り傷。深手を負った回数も少なくない。
とにかく早くバイタリティのもとにたどり着くため、レッドキャップからの攻撃の回避をおろそかにしていた結果だ。
「あいつがダグに傷をこさえた野郎か……！」
シャークハンターを警戒しながらも、バイタリティはレッドキャップを横目で見やる。
「……なるほど。バイタリティに合流されたか」
ダークレグホーンを手羽先にしようと追いかけてきたレッドキャップであったが、バイタリティの視線に気がついたようだ。
「そして……」
さらには、もう一体のサメ。
「シャークハンター？」
青銀のシャークスーツを着たシャークノイドは、暗黒サメ組織で悪名轟(とどろ)く存在である。
「あの死神は思わぬ邪魔者ですが……我々の目の上のこぶであるシャークノイド。始末ができるのは好都合です」
――ニボシたち！
レッドキャップが合図をすると、十数のカプセルニボシが円を描くようにして、シャークハンターとバイタリティ、ダークレグホーンを取り囲んだ。
「ニボシー……」
「ニボシー……」
戦闘用カプセルニボシたちは駆除対象である三体のサメに、三叉槍(さんさそう)を突きつける。
「おい……シャークハンター」
「……一時休戦と言いたいのか、バイタリティ？」
「話が早えじゃねぇか」
コキッ、とバイタリティが左手を鳴らした。
「てめえとの決着は後だ。いったん研究所のヤツらをぶっ殺そうぜ」
「いいだろう」
ボスの意見に、ダークレグホーンも異論はないようであった。
三体のサメは背中合わせになり、ニボシたちに拳や手羽を向ける。
「カプセルニボシ！　シャークハンターも〈ワイルドブレーメンズ〉もまとめて殺してやりなさい！」
「ニボシーッ！」
レッドキャップの一声で、ナナオウジ路地裏の戦いが

幕を開けた！
　多くのニボシたちがいっせいに三叉槍を構えての突進！　このままでは串刺しだ！
「コケーッ！」
　ダークレグホーンは影を展開、黒く大きな影ニワトリが、ニボシたちを手羽で薙ぎ払う。
「ニボシーッ！」
　ニボシたちが吹き飛んだ！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
　そこへアノマロカリスの形を取ったカンブリアオーラ弾、アノマロ・シュートを放つのはシャークハンター。
　連続的に繰り出されるアノマロ・シュートは、ニボシたちの頭部を無慈悲に狙う。
「ニボシーッ！」
　断末魔を上げてニボシ共の首が飛ぶ！
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
　シャークハンターとダークレグホーンが作ったニボシの隙間から、包囲網を突破するバイタリティ。
　残ったニボシたちは暴れ狂うバイタリティに三叉槍を突き刺すが、彼のサメハダは頑丈であった。
「ニボシーッ！」
　バイタリティの体当たりに巻き込まれて吹き飛んだニボシたちが、二度目のアノマロ・シュートの餌食となる。
　そうして、サメの牙をむき出しにしたバイタリティは、ニボシらの後ろで包丁を持つレッドキャップのもとにたどり着いた。
「手始めにてめえから死んでもらうぜ」
　体に刺さった三叉槍を引き抜きながら、レッドキャップを睨みつけるバイタリティ。
「いいでしょう。見れば相当お疲れの様子」
　レッドキャップの包丁が、バイタリティの血を求める。
「すぐにでも解体してあげます」
　彼は鈍く光った包丁を振りかざし、
「キエエエエエ！」
　狂った快楽屠殺精肉加工業者のごとく、バイタリティに襲いかかった！
　この包丁は調理用ではない。生物を殺すことに重点を置いた殺傷武器だ。
「今夜のつまみは死にかけのサメで作ったお刺身とフライドチキンだぁーッ！」
　言動がムゴイ！　これがレッドキャップの本性か！
　きわめて危ない殺人鬼のような攻撃であったが、これを止めるはバイタリティの左腕。
　包丁は彼のサメハダを切り裂いた。
　血が流れ、肉に刃が食い込む。
「あのニワトリよりは丈夫ですねえ……！」
　バイタリティの左腕を完全に切断すべく、レッドキャップはさらに力を込める。

自慢の殺人包丁で生き物を斬り殺すことに快感を覚えているレッドキャップ。
彼はそのことに夢中になっていたがゆえ、
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
敵の反撃にまったく対応できなかった。
レッドキャップの顔面を鷲掴(わしづか)みにしたのは、バイタリティの右手！
「オワーッ！」
レッドキャップの頭蓋骨が、ミシミシと鳴る。
バイタリティはこのまま頭を破壊するつもりだ！
「は、離せ、離せーッ！」
レッドキャップはもがいた。今度は敵の右手を包丁で切り裂き、逃れようとした。
しかし。
殺人包丁がバイタリティの左腕から抜けない。
バイタリティが力ませた筋肉が、腕に食い込んだ武器をガッチリと固定しているのだ。
「か、返せ、私の包丁！」
両手で包丁の柄を掴み、武器を取り戻そうとするレッドキャップ。
しかし、包丁は地面に埋まった巨大なカブのように、うんともすんとも言わない。
その間にも、バイタリティの右手はレッドキャップの頭部を締め続ける。
「離せーッ！」
レッドキャップは包丁を手放し、自分を締め上げるバイタリティの腕を掴んだ。
しめ縄のごとく太い腕から逃れようとするレッドキャップ。
だが、こちらも同様の結果に終わった。
バイタリティの右腕は、大木のように動かぬ。
レッドキャップの頭蓋骨も限界を迎えていた。
「オワーッ！」
もがく彼が最期に見たのは、バイタリティの憤怒(ふんぬ)の瞳であった。
「アバーッ！」
トマトのように握りつぶされた、レッドキャップの頭部！
超人シャークノイドであっても、頭部が砕け散ればさすがに死ぬ。
首から上がなくなったレッドキャップの体は、アンモニア臭を放ちながら、ジュウジュウと溶けていった。
「たわいもない野郎だぜ」
バイタリティは、サメの血が付いた右手をブルブルと振る。
手負いの野生動物ほど恐ろしい者はない。相手がケガでろくに戦えないと油断したのが、レッドキャップの敗因であった。

「ニボシーッ！」
すっかり数を減らしていた残党のカプセルニボシたちであるが、ほとんど全滅していた。
適切に対処できるならば、量産カプセルニボシごとき、シャークハンターの敵ではないのである。
ダークレグホーンの影も、ニボシ退治に大いに貢献していた。
「レッドキャップを殺したか」
シャークハンターが残ったニボシを一掃した後、バイタリティに顔を向けた。
「おう」
バイタリティが左腕の包丁を抜くと、傷口から血が流れ出る。
今さらこの程度、どうということはない。
「ダグ。ブーツとファイアはどこだ」
戦の勝者となった三体のサメは、ツチノコを探すため路地裏を後にする。
ナナオウジの夜は、まだ明ける様子はない。

V

ロングブーツの一番の武器は、その身軽さである。
ピスト・シャーク因子を捕食した彼女は、レイピアとスピードで立ち回る、素早さ自慢のシャークノイドだ。足も速い。
そのロングブーツであっても、大量のカプセルニボシとシャークノイド二体を相手に、ツチノコを抱えながら逃走を成功させるのは難しいことであった。
「ニボシーッ！」
逃走経路を塞ぐように三叉槍を突きつけてくる、先回りをしてきたニボシたちを斬り捨てながら、ロングブーツは走り続ける。
静まり返った通りに出た（ツチノコのウワサのせいで人がいないのだ）彼女は、〈ラーメン〉と書かれた看板のある屋根に飛び乗った。
薄汚れた星空の下、そのまま屋根を走るロングブーツ。
まるで千両箱を抱えるネズミ小僧だ。
ピョンピョンとウサギのように屋根を渡っていった彼女は、室外機の並ぶ路地裏へと降り立つ。
周囲に磯のニオイはない。カプセルニボシは近くに来ていないようだ。
それでも敵を撒いたと思わない方がいいだろう。
ロングブーツは神経を集中させながらも、ファイアフ

ラワーに話しかける。
「悪いな、バタバタ揺らしちゃって」
ツチノコは首を横に振った。
ロングブーツが一呼吸し、足をプラプラとやる。束の間のストレッチだ。
「……あのさ、ファイアフラワー」
そして、〈ワイルドブレーメンズ〉の紅一点は、傷ついた後輩の頭にそっと触れた。
「色々、アンタの言いたいことはわかったよ。でも、一つ文句をつけてやる」
「ツチ」
「アタシたちは、ファイアフラワーに殺されるほど弱くない」
ロングブーツの肉球が、ファイアフラワーの頭をなぞる。
「アタシたちを殺しちゃうから〈ワイルドブレーメンズ〉を離れるなんて、そりゃあ、アタシたちを舐めすぎなんよ」
フフフ、と彼女は笑った。
「もし、ファイアフラワーがシャーク因子に飲まれた時は、きっとオカシラや、みんながコテンパンにしてやるさ。何か問題があったらケンカで解決するのがうちらの組織だからな」
「……」
「だからさ……帰ろう。そして、みんなで生きるんだ」
目を細めるロングブーツ。
「ツチ……」
室外機のファンが回る音が、静かに流れる。
本当に、本当に自分は〈ワイルドブレーメンズ〉にいても良いのであろうか？
ファイアフラワーはロングブーツを見上げる。
「……」
彼女は鼻をヒクヒクと動かし、眉間（みけん）にしわを寄せていた。
「……まあ、まずは目先のヤツらを何とかしなきゃいけないわけだが」
また、磯のニオイが漂ってきている。
「しつこい連中だ」
ロングブーツはレイピアをかまえ、再び逃走準備に入る。
ロングブーツが走りだそうとした、その時。
「ツチ！」
どこからともなく白い飛来物！
「ミエァァア！」
これをレイピアで真っ二つにしたロングブーツ。
「……ただの野良猫だと思っていたが、やるな」
ロングブーツに投げた物と同じ白い玉を、手でもてあそぶ一体のサメ。

「逃げ足の速いメスネコだ」
そう、クリングケークとタイマイがロングブーツを追いかけてきたのだ。
二体のシャークノイドの反対側の道からは、磯のニオイ。
「ニボシーッ！」
「ニボシーッ！」
カプセルニボシだ。挟み撃ちである。
前後の道は封じられた。ならば、また屋根に飛び乗って逃げるしかない。
ロングブーツは一気に跳躍。壁に水平に張られたパイプに乗り、そこからさらにジャンプして屋根に乗ろうとする。
しかし、この逃走ルートをクリングケークは想定していた。
「ミエァァッ！」
敵の移動経路をニボシによって制限したクリングケークの、的確な白玉投擲（とうてき）！
しかし、攻撃こそ当たってしまったものの、ロングブーツは予定通りパイプに着地した。
彼女は続けざまに飛び跳ね、逃げようとした……が。
「クソッ、モチが取れない！」
ロングブーツの右足にくっついた白玉、これはクリングケークのシャーク因子、モチ・シャーク由来の能力だ。
強力な粘着作用があるモチ弾は、ロングブーツの足とパイプをくっつけているのだ！
モチ弾を引きはがそうとするロングブーツに、クリングケークの追加のモチ弾！
咄嗟にレイピアを振るロングブーツ。だが、自慢のスピードを封じられては、耐えしのぐのは厳しかった。
「ミエァァッ！」
両手両足にくっつくモチ弾！
ロングブーツは十字架のように張りつけにされてしまった。
彼女の腕から離れ、落下するファイアフラワー。
一体のカプセルニボシが、この弱ったツチノコを受け止めた。
「ニボシー」
「ご苦労」
カプセルニボシの手から、ツチノコをもらうタイマイ。
彼は手際よく、ファイアフラワーをツチノコ捕獲用ケージに放り込んだ。
「ファイアフラワーを返せ！」
叫ぶロングブーツの口に、モチ弾を投げつけたクリングケーク。
「モガーッ！」
呼吸困難！　モチが気管を圧迫する！
「さて、ファイアフラワーは回収したが」

ロングブーツに目を配りながら、バウンドケークはタイマイに質問をした。
「あのネコはどうするんだ？」
「始末しましょう」
「りょーかい」
タイマイの言葉の後、クリングケークはモチ弾を生成、ためらいなくロングブーツの胴体を狙う。
「モガーッ！」
モチ弾で口をいっぱいにした彼女の叫びは、喉からもれ出た空気そのものであった。
「ツチ……！」
その光景を見て暴れるファイアフラワーであったが、大きなダメージを受けているこの状態では、タイマイが持ってきたツチノコ捕獲用ケージから逃れることはできなかった。
「モガーッ！」
クリングケークのモチ弾を、何度も胴体に受けるロングブーツ。
必死に両手足を動かそうと試みるも、筋肉に力を入れるまえに、モチ弾がロングブーツを苛む。
「モガ……」
段々と淀んでいく彼女の瞳。
息が苦しい。頭もぼーっとしてくる。
自分にモチ弾が飛んでくることを、手足のしびれた彼女はどこか他人事のように考えていた。
ああ、アタシは死ぬのか。ここで。
モチを喉に詰まらせて。
口の端からよだれが垂れる。
今にもアンモニア臭を上げ、〈ワイルドブレーメンズ〉のメンバーたる三毛猫は蒸発すると思われた。
まっすぐ向かってくるモチ弾。
「ニボシーッ！」
すると、特徴的な声と共に吹き飛んできた一体のカプセルニボシが、ロングブーツへと発射されたモチ弾に命中！
ロングブーツの代わりに、ニボシの腹に穴が開いた。
「ニボシーッ！」
「……モガッ」
ロングブーツの目に、光が戻る。
ああ、ああ。来てくれた。
「てめえらぁ……！　俺の〈ワイルドブレーメンズ〉にずいぶんなことしてくれたなあ……？」
彼女の瞳に映っていたのは、ボロボロのコートに身を包む、サメ人間。
来てくれた。
アタシたちのオカシラが。
「バイタリティ……！」

驚きの表情を浮かべるタイマイ。
バイタリティが投げ飛ばしたカプセルニボシが盾となり、ロングブーツは助かったのだ。
黒いニワトリが、ロングブーツを壁から引きはがす。
「姉貴！」
ダークレグホーンの影が、ロングブーツの口に手羽を突っ込んだ。
「……プハ」
影ニワトリの手羽には、彼女の牙の跡がついたモチ弾。
「ウエェェ……ゲホッゲホッ」
数度、せきこむロングブーツ。
「平気か、ブーツ姉貴？」
「ああ。よくアタシたちを探してくれたよ、ダグ」
「へへん！」
先輩に褒められて、ダークレグホーンは嬉しそうであった。
「後はファイアフラワーを取り返すだけだぜ！」
影ニワトリに支えられ、ロングブーツはバイタリティとダークレグホーンのもとにやってきた。
「レッドキャップはしくじったわけか」
と、クリングケーク。
「ですが、ヤツら全員大きく消耗しています。瀕死のサメ三人ごとき、どうにでもなるでしょう」
「……四人だ」

戦局を確認するタイマイの言葉を訂正するかのように、聞こえてきた声。
声の主たる青銀のシャークノイドは、自身の存在を主張するかのように、一歩一歩大地を踏みしめ、やってくる。
「クリングケーク。タイマイ。貴様らサメを狩りに来たぞ」
「……シャークハンター！」
喝采！　地獄の狩人のお出ましだ！
「タイマイ。どうする？」
「……ここで彼らを全滅させられれば、大きな利益。それを狙いつつも、撤退を優先しましょう。当初の目的は達成されたのですから」
「りょーかい」
タイマイがケージを片手に、路地裏を抜け出した。クリングケークはモチ弾を作りつつ、彼の背後を守るように後に続く。
「逃がすかぁ！」
傷だらけのバイタリティが駆け出す。
「ニボシーッ！」
「ニボシーッ！」
彼の進行を止めるべく、三叉槍をかまえるニボシたちを、
「コケーッ！」

「ミェァアア！」
影ニワトリとレイピアが撃退！
「オカシラ、ニボシ共はアタシたちでなんとかする！」
息を荒げながらも、ロングブーツはレイピアを構えていた。
「ファイアフラワーを取り戻してくれ！」
「あと、シャークハンターもな！　途中でオカシラを殺すんじゃねえぞ！」
幾度もレッドキャップの包丁で刺されたダークレグホーンも、まだ戦うつもりでいた。
二人のアニマルシャークノイドの声を受け、
「わかった！」
バイタリティとシャークハンターは、暗黒サメ組織のシャークノイドたちを追う。
「二人を放っておいていいのか、バイタリティ」
「……ブーツもダグも、今にもぶっ倒れそうなくらいヘロヘロだがよ、カプセルニボシにやられるほどヤワじゃねえ。あいつらのことは信じてる」
「そうか」
足を動かしながらも、〈ワイルドブレーメンズ〉のボスはシャークハンターにそう答えた。
二人が路地裏を抜けた直後、
「む！」
右の方から飛来するモチ弾。
クリングケークの飛び道具である。
モチ弾を視認したシャークハンターは、すぐさま右手の五指の腹をくっつけ、手を槍の先端のような形状にした。
そしてまっすぐに突き出された右手が、危険なモチ弾を貫く！
爆ぜるモチ弾！
これぞ古代武術カンブリア殺法の技が一つ、スクリュードライバーだ！
「簡単にはやられてくれねえよな」
二十五メートルは先を走るクリングケークが、さらにモチ弾を連続投擲。
粘着モチ弾への迂闊（うかつ）な対応は、両手足を拘束されてしまうことを意味する。
ダメージが蓄積されていても、二人は歴戦の戦士であった。シャークハンターとバイタリティは、モチ弾を巧みにかわしていく。
しかし、歴戦の戦士であっても、連戦のダメージと疲労は大きかったのであった。
クリングケークはよく訓練された動作でモチ弾を投擲。
いよいよバイタリティの左脚にモチ弾が命中！
「クソが！」
さらにバイタリティの右脚にモチ弾が命中！
「クソがあ！」

モチ弾は外見以上に重量がある。シャークノイドにとってはさほどでもない重さかもしれないが、このチェイス中で足に負荷がかかるのは致命的だ。
バイタリティの走る速度が落ちてしまう。ファイアフラワーは連れ去られ、トリノスナ研究所に逆戻りとなってしまう。
そうなれば、彼の自由は二度と手に入らなくなる。
暗黒サメ組織の道具となり果てるのだ。
「……逃がすかよおぉおお！」
火事場のバカ力というものであろうか。バイタリティはシャークオーラを振り絞り、グングンとクリングケークとタイマイとの距離を詰めていく。
クリングケークがバイタリティにモチ弾を発射するが、
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
バイタリティのやや後方についてくる、シャークハンターのアノマロ・シュートがこれを相殺した。
その隙に、ファイアフラワーを持つタイマイに襲いかかるバイタリティ。
「ＧＡＲＣＨＡＡＡ！」
バイタリティの剛腕がタイマイに振るわれる。
「！」
だが、バイタリティの攻撃の手が止まった。
なぜか？
その答えを知りたければ、タイマイの左手を見るがよい。
彼がガードのために掲げた左手には、ぐったりとしたファイアフラワーの入ったツチノコ捕獲用ケージ。
卑劣！　タイマイはファイアフラワーを盾に、バイタリティの攻撃を無理やり止めさせたのだ！
「アガーッ！」
動きの止まったサメに攻撃を当てることなど、実にたやすい。
タイマイの痛烈なキックが、バイタリティの胸部に直撃した。
この、少しだけ足の止まった攻防の間に、シャークハンターも三体のサメに追いついてきた。
クリングケークがモチ弾を生成しようとする前に、シャークハンターの攻撃が彼を狙う。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
カンブリアシャウトと共に放たれるパンチ。身を反らし、回避するクリングケーク。
これをきっかけに、シャークハンターとクリングケークの接近戦が始まる。
他方、建物三つ分進んだ先では、逃げるタイマイにバイタリティが必死に食らいついていた。
バイタリティがタイマイに向かっていくたび、亀甲模様のシャークスーツを着たシャークノイドはケージをちらつかせ、彼の攻撃を躊躇（ちゅうちょ）させる。

そこに容赦のない一撃を浴びせていくタイマイ。
「アガーッ！」
一打、二打、三打……！
右ストレートが、エルボーが、バイタリティに叩きこまれていく。
万全の状態であれば、負けることはなかったであろう。
だが、今のバイタリティは休息もなしに戦い続けており、おまけに仲間を盾にされている。
どうしようもなく不利な状況であった。
「ゴボッ……」
やがて、半ば一方的に殴られ続けたバイタリティが、膝をついた。
あの、シャーク耐久力自慢のバイタリティが。
強敵シャークハンターとの戦闘、連戦、その後仲間を探すためにナナオウジを駆けずり回り、そしてこの戦い。
ここにきてムチャが祟ったのだ。
「おや……」
逃げ切るつもりのタイマイであったが、こうなれば話は別だ。
「意外ですね。もう体力が尽きましたか」
バイタリティを見やるタイマイ。
「……んなわきゃねぇだろうがあッ……！」
怒りに燃える目をぶつけ、タイマイに飛びかかるバイタリティ。
だが、タイマイはレッドキャップのような慢心をしないシャークノイドであった。
バイタリティの攻撃を防いだタイマイは、返す足でバイタリティを蹴り飛ばす。
吐血！
「ツチ……！」
目の前でバイタリティが残虐な仕打ちを受けるさまを、ファイアフラワーはケージの中で見せつけられていた。
自分のせいだ。
自分のせいで、オカシラはこんなにも傷ついている。
ジャージーデビルを傷つけ、タカオ・マウンテンを下り、こうしてトリノスナ研究所に捕まっているから、オカシラが死にそうになっている。
シャーク凶暴性が発露していた時の記憶が、薄々ながらも頭をよぎっていく。
ロングブーツは、もし自分が暴れてもみんなが止めると言ってくれた。だが、次に自分がバイタリティの命令を無視した時、また同じようなことが起こるかもしれない。
また……みんなが傷つく姿を見ることになる。
そもそも、今でさえ自分がいるせいで、バイタリティはろくに戦えていないのだ。
タイマイの拳をみぞおちに受け、後転しながら吹き飛ぶバイタリティ。

「このツチノコは我々が有効利用します。だから貴様は死になさい」
タイマイが暴れサメを駆除すべく、バイタリティに近づいていく。
「……」
ファイアフラワーの体が、一度、震えた。
オカシラを死なせたくない。
今、自分にできる最大の抵抗を。
「……！」
ケージを持ったタイマイが、ファイアフラワーの異変に真っ先に気づいた。
ツチノコの全身から火花が散り始めている。
「ツ……チ……」
彼が捕食したハナビ・シャーク一族のサメたちは、火を吹き人々を燃やし、火花をまとった体当たりで戦車を破壊した。
だが、真に恐れられた攻撃は。
「ま、まさかこいつ……！」
彼らは追いつめられた時、自身の体に火花を溜めて、生物爆弾よろしく特攻を仕掛けた。この自爆能力により、ハナビ・シャークとの戦いは、想定以上に人々に甚大な被害を及ぼしたのだ。
ファイアフラワーは、ハナビ・シャークの必殺技を放つつもりなのだ！
「ツチィ……！」
バチッ　バチバチッ
ケージがファイアフラワーの火花によって、赤く熱を帯びる。
「待て、おい、ファイアフラワー！」
昔のハナビ・シャークのことは知らぬバイタリティであったが、ファイアフラワーがこれから何をしようとしているのか察してしまった。
「ボスの命令だ！　今すぐ攻撃をやめろ！」
現時点、ファイアフラワーはシャーク因子に飲みこまれていない。
そんな状態で「ボスの命令」を無視するのは、これが最初で最後となるであろう。
孤独だったファイアフラワーには、サメの仲間たちがいた。共に日々を過ごした仲間たちが。
原動力は、それで充分であった。
「ツチイイ……！」
「ま、まずいッ……！」
タイマイはとっさにケージを手放そうとした。
バチバチバチッ
「……ツチイイィィアアアアアア！」
「やめろおおおぉぉおおお！」
ファイアフラワーのおたけびとバイタリティの絶叫が、ナナオウジの夜道に響きわたる！

――ドオオオォォッ！

閃光と共に鳴り響く爆音。
ツチノコ捕獲用ケージを中心に、広がる爆風。
「ファイフラワアアアアアッ！」
円状に色めく、美麗な火花。
……ややあって。
モウモウとすさぶ爆風はやんだ。
そこにあったのは、粉々になったケージと、地面に伏したタイマイ。
ファイアフラワーの姿は、影も形もない。
「な……なんてツチノコだ……」
驚くことに、爆発の中心にいたにも関わらず生きていたのはタイマイだ。カメ・シャーク因子由来の防御能力である。
しかし、ハナビ・シャークの自爆をまともに受けては、さすがに息も絶え絶えであった。
「……！」
殺気を感じたタイマイ。
「おい、タイマイ」
視線を移した先にいたのは、ゾッとするほど冷たい目をしたバイタリティである。
「……てめえらにかける情けはねえ」

血みどろになった異形シャークノイドのオーラは、シャークノイドのタイマイにすら、サメへの恐怖を抱かせ、
「ひっ……」
バイタリティの右足裏が、タイマイの視界から夜空を遮る。
「死ね」
タイマイは、怒り狂う人工シャークノイドに頭部を踏み抜かれた。

シャークハンターも、徐々にクリングケークを押し込んでいた。
クリングケークのモチ弾は間違いなく強かった。遠距離戦ではシャークハンターをも凌いでいた。
しかし、現在展開されているのはゼロ距離の近接戦。
シャークハンターの古代武術カンブリア殺法が光る近接戦なのだ。
それなりの対サメ戦闘もできるクリングケークであったが、目の前のこいつは規格外だ。
ケガをしているのか疑わしいほどの、激しい攻め。
まともに打ち合っては負ける。
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
シャークハンターの左フックを、クリングケークは手

の平で受け止めようとする。
甘いガードだ。シャークハンターであれば、そのままぶち抜くことができるであろう。
だが、これは罠だ。
クリングケークの手の平にはモチ弾！　モチ弾でシャークハンターの左手を捕えるのが目的だ。
（いいぞ、ここでシャークハンターの動きを止め、ペースを握り返す！）
彼は決して遠距離頼みのサメではなかった。
シャークハンターのカンブリア殺法に、持てる能力を使って対抗しようとする腕前のあるサメであった。
「決まったあッ！」
クリングケークがシャークハンターの左フックを受け止め……いや、待て。
フックの軌道が変わった！
シャークハンターはクリングケークの思惑に気がついていたのだ！
フェイントをかけたシャークハンターの攻撃が、クリングケークの脇腹にねじ込まれる。
「ゴフッ……！」
大きくよろけたクリングケーク。
ここがチャンスだ！
「ＳＨＡＲＤＥＮＳ！」
勁烈！　シャークハンターの連続打撃攻撃！
わずかに残ったシャークオーラをカンブリアオーラに変え、これですべてを終わらせるつもりの猛攻だ！
「モガアアアアアアアアアアッ！」
クリングケークの白いシャークスーツが見る間にへこんでいく……！
……果てに、決着の時が訪れた。
シャークハンターの最後の攻撃を喰らったクリングケークが吹き飛び、倒れる。
「サメは狩る」
クリングケークの肉体は、アンモニア臭と煙を上げ、ナナオウジの夜に溶けていった。

Ⅵ

しばらく後、恐怖の人食いツチノコは、謎の猛獣ハンターによって討伐されたというウワサが、ナナオウジに広まった。
実際、ツチノコの目撃情報も、最近はめっきりとない。
ナナオウジの町には活気が戻り、田牧のおでん屋も夜

営業が再開された。
店先ののれんも、どこか揚々とはためいている。
ある夕方、〈お　で　ん〉と書かれたのれんをくぐり、田牧の店に一人の客が訪れた。
「らっしゃい……お、清水君」
入店してきた青年に、田牧が声をかけた。
「どうも」
まだ席に空きの多い時間であった。海峙はカウンター席に座り、
「まずは大根と……玉子をお願いします」
「あいよ」
田牧からお冷やを受け取った。
「清水君がうちにインタビューに来てから、一週間過ぎくらいかな。ツチノコが、町からいなくなったらしい」
「……そうですか」
「タカオ・マウンテンにいたツチノコを、誰かが倒してくれたんだとさ」
「それは……安心しました」
「だな。本当、よかったよ。うちも商売あがったりだったし……これ以上、うちのお客さんがいなくなっちまっても困るしな」
ホッとしたような、亡き客を想うような田牧の顔を眺めながら、海峙はあの夜のできごとを思い返す。
「……なんてこと、やりやがった」

サメを狩り終えたシャークハンターのそばで、バイタリティはがっくりと膝を落としていた。
あのバカ、と、彼は大きく裂けたサメの口を震わせる。
「バカやろおおおおお！」
バイタリティは、地面を何度もグーで殴りつけた。
何度も、何度も。
「……」
シャークハンターは何も言わなかった。
彼はファイアフラワーを殺そうとしたのだ。そんな自分が、家族を失ったこの男に言葉をかける権利など、ありはしない。
そのまま、彼は無言でその場を後にした。
シャークハンターは冷酷にサメを狩るサメであったが、家族の死を悼(いた)む者を後ろから殺すほど、非情にはなりきれなかった。
ナナオウジの人食いツチノコは討伐された。
あの夜は、それだけでよかった。それだけで、よかった。
「ほら、お待ちどう」
海峙の前に差し出された器。大根と玉子。そしてちくわ。
「一個、おまけだ。ツチノコがいなくなった記念ってヤツだな」
田牧が微笑む。

「ありがとうございます」
海峙は礼を述べ、茶色の木筒に立てられた割り箸を手に取った。
次に、器の端っこにからしを少しつけ、
「いただきます」
両手を合わせる海峙。
湯気の立つ大根を割り箸で半分にした海峙は、片方をつまみ、口に運ぶ。
大根には味がよく染みていた。

ウエノシティに夕日が沈む頃のこと。
タカオ・マウンテンの一角で、煙を上げる小さなたき火を囲む、異形の集団がいた。
「……」
黙って目をつぶる二足の犬や猫、静かにすすり泣く音を立てるニワトリにロバの怪物……。
彼らはボロボロのコートの男に促され、たき火に花や果物、干し肉を粛々とくべたばかりである。
野生のサメ組織〈ワイルドブレーメンズ〉は、ファイアフラワーの弔いを行っていた。
過酷な環境に置かれている彼らにとって、死とは隣人めいた存在である。
群れの仲間を失うこと。
自然界では日常茶飯事のことだ。
それでも、散っていった仲間のことを、そう簡単に割り切ることはできなかった。
「……チクショーッ！」
こらえきれなくなったダークレグホーンが泣き叫ぶ。
「ファ、イ、ア」
昨日散々にえぐえぐと泣いていたジャージーデビルの目から、再び涙がこぼれ落ちていく。
ウルトラファイドとロングブーツは、後輩たちのことを静かに見つめていた。
「……死ぬのはファイアだけじゃねえ、俺も、お前たちも、いずれ死ぬ」
コートのポケットに手をつっこみ、立ち上る煙を見守るバイタリティが、ブレーメンズメンバーに語る。
「一年後かもしれねえ、一ヶ月後かもしれねえ。下手すりゃ明日かもしれねえ。お前たちも、いつあの世に行っても悔いの残らねえように、きちんと生きろよ」
孤独だったツチノコが〈ワイルドブレーメンズ〉といた時間はほんのわずかであったが、それでも、彼は確かに幸せを手に入れていた。

ファイアフラワーが安らかに眠れることを願う〈ワイルドブレーメンズ〉の祈りが、魔山タカオ・マウンテンの空に昇っていった。